

【解説　日本の精神と美しさ】

解説は、現代語版のストーリー展開に沿って行うことにする。

今から三万年以上前に、地球外生命体が地球にやってきたと思われる。

地球人の創造主としての根源の神である。既に生命の種は神々によって地球に撒かれていたので、地球上には多くの生命体の種が分化していた。

それらの生命体は、地球上で生と死を繰り返すことで、「霊界」が形成されていたので、神々は、この霊界に介入することにした。

その目的は、神々に向かう知的生命体が生まれるかを実験する為である。神々もまた悠久の根源と共に、自らを表現する理念があるからである。

神々は、クレーグとなる生命体に対する、現象界での遺伝子操作と、霊界での理念操作とを限りなく試して、サビエンスを作ったのである。

木花之聞耶姫の物語に、なぜ人類の歴史が関係するのかが、それは、木花之聞耶姫が生きた「富士王国」の歴史があるからである。

富士王国は筆者の造語であるが、確かに富士山麓の地にこの王国があったことが日本の歴史書と言われる古事記、日本書紀に先立つ、ホツマツタエに記されている。その富士王国があった富士山麓に、天孫降臨がなされたのである。故に、プロローグでこのことを書いた。

現在、富士山は山梨県と静岡県に広がるが、静岡県の公式ホームページでは静岡は「ふじのくに」である。

さて、プロローグの解説に、現代の事実を付言しておく。

ヒトの体の設計図をゲノムと云うが、1984年に「ヒトゲノム計画」という国際科学プロジェクトが提案された。生殖は男女の染色体を交換するわけであるが、ヒト染色体を構成するDNAは約30億の塩基対の配列を解読しなければならぬ。このプロジェクトは、1990年から米英仏日により開始され、2003年に解読が完了した。2004年には、ヒトゲノムでは蛋白質をコードする遺伝子は2万2000と推定されると発表されている。また、これらの解析の結果を受けて、現在という子孫から先祖をたどると、8人の原初に行き着いたのである。

その意味するところは、それまでイメージされてきた進化の様相を変え、ヒトは人工的に創造されたということ意味する。この意味するところは、大々的には発表されなかったが、科学者達ばかりと来たであろう。

ここから先は客観的科学ではなく、筆者の主観的な理解である。

ヒトの寿命を考えて、8人の原初まで遡ると人類が作られたのは約1億年前になるようだ。その頃に宇宙人が地球を実験場にして、当時存在していた生命体を利用して、失敗を重ねた実験の後に、元となる8柱（以降の単位表現とする）を地球上に創造したのである。恐らく、この8柱だけを創造した筈がない。何種類も創造されたサビエンスは、望まれる進化が期待されなかった場合は容赦なく文明もろともリセットさせたとと思う。



ホモサビエンスは概ね黒人、赤褐色人、黄色人、白人の四種であるから、原初に創造した単性クローンに性差を施し、両性種を創造したのではなからうか。それらを地球環境に合わせて配置したと思う。

ここで一気に時間スケールを千年、百年に縮めることにする。短くすれば、人間の営みと文化の香りを味わうことができよう。

日本の歴史は天皇の世紀であって、二千七〇〇年位いの歴史である。

それより古い日本の歴史は神話の世界となる。諸兄もご存知の通り、人類の文明の歴史は更に古い。ならば日本の歴史も、天皇の世紀より古い歴史が日本の神話に織り込まれているはずである。その一部が富士王国である。

大八洲あるいは八洲とは、「多くの島からなる国」と云う意味である。海路により、島を認識する場合もあったであろうが、それを含めた広がり

を意味する言葉であり、今日では「全国」という言葉に相当する。

富士王国は周辺に大小の国を従えていたので、瓊瓊杵尊は全国を巡回して統治していた。本拠地は現在の伊勢であったというが筆者の設定である。各地は人口の増加と共に手狭になってきたので、新しい開拓地を求めなければならなかった。

瓊瓊杵尊は巡幸先で富士山に登り、中腹より下界を見渡すと駿河の方向には開墾に適した土地が広がっていた。

平野は「葦原」、海岸は「葦津」という。いずれも葦に代表される、草が繁茂している様を云う。そこを開けば畑地にもなり、港にもなる。

「津」は海岸、河岸、港を意味するが、河川の中流に位置する場合には「津」と云う。河川が海に注ぐ地形が、真水の恵みにより稲作に適することは言うまでもあるまい。更に「津」では漁も盛んである。この豊かな恵みをもたらす良港沃土を「豊津葦原」というのである。

古代には、富士山の裾野にも拠点があったのだが、まだ開墾の余地が多く残されていたのである。住時では水深十メートル程度は海岸線が後退していたとすれば、富士市の北部に海岸線があり、富士宮に集落があったと推定できる。瓊瓊杵尊は眼下の地を眺めて、

「よし、この地を更に開墾しよう」と心に決めた。

富士宮市の北部は、富士山の裾野であるから坂道も多い。折れ曲がった坂道を出た辺りに「坂折の宮」という社があった。その社と集落を兼ね、

任されていたのが大山祇命であった。当時は稲作がなされていて、山間の田は区画がなされていたと思われる。その区画された田を「狭間田」と言い、その田んぼで採れた米で酒を造っていたのである。

清酒の技術はまだ無かったので、所謂、にこり酒で「天甜酒」と呼ばれ、甘みもあったのである。稲作と共に日本酒はあったのである。

ああ、酒飲みにとって、富士の国とは、良き国に生まれたものである。



皇位継承の儀式を大嘗会と言うが、多くの旗を立ててお祝いをする。

数字の「八」は、沢山と云う意味で、「櫛」は神霊が集まるという程の意味であるから、神聖な儀へに多くの旗を掲げたことであろう。

瓊瓊杵尊はこの八幡日に間に合うように、明日は伊勢に出発しなければならぬと言った。全国の開墾事業の功績を認められ、王位の継承を許されたのである。継承させたのは、王国一族の長、天照大神であるが、男神であつたように筆者には思われる。後の古事記、日本書紀では天照大神は女性神として記されている。しかし、筆者が現在の伊勢神宮にご参拝をした折りに、内宮には天照大御神の荒魂と和魂が祀られていたことから、

統治の長としては、厳しさを持つ男神が、治世としては、調和の女神が求められていたと思う。富士王国では定かではないが、男神であつたとしておこう。

木花之聞耶姫（葦津姫）の物語で、もつとも苦学するのは岩永姫の立場である。古代では朝貢に「人」が贈られている時代であり、今日の倫理とは異なる。岩永姫は優しい女性であつたかも知れぬが、諸兄の思いとして

は、美しい人が良いに決まっているのでしょうか？

しかも、身分高き瓊瓊杵尊へは、「この際、二人一緒にお願いします」という正直な親心が働いたのではないかと思いますよね。

少し年長の姉であつたら、容貌はイマイチだし、親は早く片付けたいと、あれこれ策を練つたと思うのである。

ホツマツタエには、葦津姫に思いを寄せていた他の男性は出てこないが、葦津姫が見目麗しければ、瓊瓊杵尊には隠れた競争相手がいたと、筆者には思えてならない。

折角、告白しようと思つていたのに彼女の親連は、さつさと葦津姫を差し出してしまつて、オレどうすんだよ、と嫉妬に変わった男がいても不思議ではない。親連の「二人一緒に」が潰えたのなら、オレは下女を巻き込んで、葦津姫の方も破談にしてしまふ、と思つたに違いない。

あるいは、下女の誰かが頼まれて、岩永姫を言葉巧みに瓊瓊杵尊に受け入れてもらうまでは良かったが、結局失敗して、その失策を大山祇命あたりから、こつぴとく咎められたのかも知れない。その腹いせに「種違い」を瓊瓊杵尊に耳打ちし、疑念を起こさせたのだらう。

葦津姫の苦悩は、二度の「うけい」によって神へ全託することになる。「うけい」とは神に「こうなる」という、当事者の未来を告げて誓いを立て、神の審議を仰ぐと云うものだ。最初は「桜の誓い」であり、二度目は

異なる。岩永姫は優しい女性であつたかも知れぬが、諸兄の思いとして、美しい人が良いに決まっているのでしょうか？

しかも、身分高き瓊瓊杵尊へは、「この際、二人一緒にお願いします」という正直な親心が働いたのではないかと思いますよね。

少し年長の姉であつたら、容貌はイマイチだし、親は早く片付けたいと、あれこれ策を練つたと思うのである。



大和の精神である。潔さとは自身の命を捨てても神の心に殉ずるといふ、神国日本の信仰の姿である。この信仰とは、「祭空の話し」でも、単なる「願ひ」でもなく、人生そのものを神に託すことが出来るという、リアリティである。信仰に対する確信がなければ「うけい」は成就せず、「桜の誓い」の、桜が咲き続ける奇跡も起こらない。

潔さと表裏をなすのが、「美しさ」であらう。満開の桜は美しいのは、数日を経て散りゆく「はかなさ」があればこそである。仏教的に云えば諸行無常であり、人々は一時の美しさを留め置きたいと云う気持ちはあれど、次の春を待つ。神道における転生輪廻の確信でもある。

物語はハッピーエンドに終わるのであるが、木花之聞耶姫は、火明尊、火進尊、彦彦出見尊の三神を産み育てたことにより「安産・子育ての神」として祀られている。また、富士の裾野で繰り返された、子供の命のエピソードから、富士山は「妊みの山」とも呼ばれている。

そして、瓊瓊杵尊も木花之聞耶姫も威を盛って「神上がる」のであるが、諸兄はそれで事罷が「終わる」とは思わぬい筈だ。この霊界への移行が子孫を見守り、また神上がつて「神」となった後の再生への期待を教える信仰の姿である。富士王国は日本精神の原点であると云えよう。

今和三年五月二十日

大中臣正比呂 記

参考文献

秘められた日本古代史　ホツマツタへ　松本善之助　著　昭和五十五年七月五日　毎日新聞社　発行

古代文獻「ホツマツタエ」に記された創造神　天御祖神の降臨　大川隆法　著　平成三十一年一月二十日　幸福の科学出版　発行

失われた日本人と人類の記憶　矢作直木・並木良和　著　令和元年十一月八日　青林堂　発行

